

傳 藤原公任 金澤本萬葉集 地

301
10

帙
入



始



301

10

傳藤原公任書

金澤本萬葉集

釋文

地

金澤本萬葉集釋文 (地)

長忌寸意吉麻呂見結松哀咽歌二首

磐代乃岸之松枝將結人者反而復將見鴨

いはしろのさしのま徒えをむ須ひ多る

ひごは可へ利てまたみけむ可も

磐代之野中爾立有結松情毛不解古所念未詳

い者しろのなかに多てるむ須ひ万徒

こゝ呂毛とけ春む可し於もへは

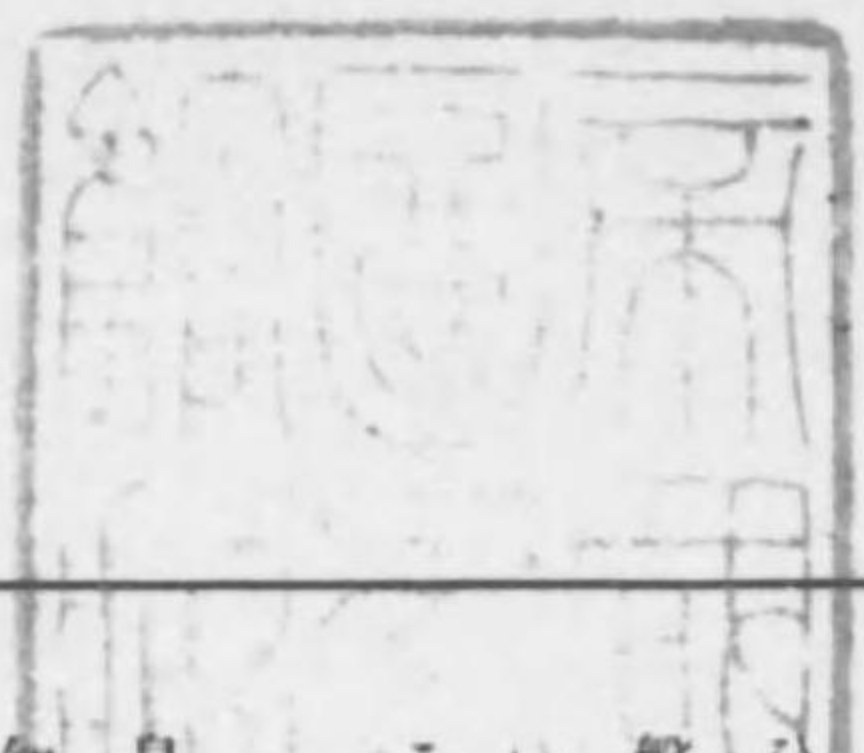
山上臣憶良追和歌一首

鳥翔成有我欲比管見良目杼母人社不

知松者知良武

と利はなるわ可於もひ徒ゝみらめと无

ひとこ曾しらねま門はしるらむ



右件哥等雖不挽樞之時所作唯擬哥
意故以載于挽歌類焉

大寶元年辛丑于紀伊國時見結松一首柿本朝臣人鹿
呂歌集中書也

後將見跡君之結有磐代乃子松之宇禮

乎又將見香聞

のちみむ登きみ可むすへるいはしろの
こ万つ能う禮をまたみ介る可も

近江大律宮御宇天皇代天命開別天皇澄日天智天皇

天皇聖躬不豫之時太后奉御歌一首

天原振放見者大王乃御壽者長久天足有

あ万能者らふ利さけみれ八於保きみの

いのちは奈可くあま多らし阿利

一書曰近江天皇聖體不豫御病急時太后

奉獻御歌一首

青旗乃木旗能上乎賀欲布跡羽目爾者
雖視直爾不相香裳

あを者たのこは多のうへを可よふとは

め爾はみれと无多々にあ者ぬ可も

天皇崩御之時倭太后御作歌一首

人者縦念息登母玉獲影爾所見乍不所忘鴨

ひとはいさ於もひやむと无多ま可徒ら

可け爾みえ徒々わすられぬ可も

天皇崩時婦人作歌一首姓氏未詳

空蟬師神爾不勝者離居而朝嘆君放居而

吾戀君玉有者手爾卷持而衣有者脱時毛

無吾戀君曾伎賊乃夜夢所見鶴

天皇大殯之時歌二首

如是有乃。豫知勢婆。大御船。泊之登萬里人。
標結麻思乎。
可カらむ登ト於コもひし利セ世セは於コ保ヒみふね
とまる東トま利カにしめゆはましを
八隅知之。吾期大王乃。大御船。待可將戀。四賀
乃辛崎舍人。
やしま志シるわ可カ於コ本ホきみの於コ保ヒみふね
まカち可カこひな无ク志シ可カの可カらさ支シ。
太后御歌一首
鯨魚取。淡海乃海乎。奥放而。榜來船邊。
附而。榜來船。奥津加伊。痛勿波。彌會邊津。
加伊。痛莫波。彌會。若草乃。媼之。念鳥立。
石川夫人歌一首

神樂浪乃。大山守者。爲誰可。山爾標結。君
毛不有國。
さカ、那ナみの於コ本ホやまも利カは多タ可カしシ氏シ可カ
やまにしめゆふきみもあら那ナくに
從山科御陵。退散之時。額田王作歌一首
八隅知之。和期大王之。恐也。御陵奉仕流。山科
乃鏡山爾。夜者毛。夜之盡。晝者母。曰之盡。哭
耳呼泣。乍在而哉。百磯城乃。大宮人者。去別
南。
明日香清御原宮御宇。天皇代天淳中原眞人天
皇壽曰天武天皇
十市皇女薨時。高市皇子尊御作歌三首
三諸之神。神須疑。已具耳矣。自得見。盥
乍共。不寐夜。叙多

神山之山邊眞蘇木綿短木綿如此耳故
爾長等思伎

みわやまのや万へま曾ゆふみし可ゆふ
可くのみゆゑにな可し於もひ支

山振之立儀足山清水酌爾雖行道之白鳴
やまふ支能爾保ひしやまのしみ門をは
久みにゆ可め登みちのしら那久

紀曰七年戊寅夏四月丁亥朔癸巳十市

皇女卒然病發薨於宮中

天皇崩之時太后御作歌一首

八隅知之我大王之暮去者召賜良之明來
者問賜良之神岳乃山之黃葉乎今日毛
鳴問給麻思明日毛鳴召賜萬旨其山乎振

放見乍暮去者綾哀明來者裏佐備晚荒妙
乃衣之袖者乾時文無

一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首

然火物取而裏而福路庭乃澄不言八面智男雲
ともしひのど利てつゝみてふくろ爾は
いるをい者すや

雲向南山陣雲之青雲之星離去月牟離而

天皇崩之後八年九月九日奉爲御齋會之夜

夢裏習賜御歌一首

明日香能清御原乃宮爾天下所知食之八隅
知之吾大王高照日之皇子何方爾所念食可
神風乃伊勢能國者與津藻毛靡足波爾楹
氣能味香乎禮流國爾味凝文爾乏寸高照

日之御子

藤原宮御宇天皇代高天原廣野姬天皇

天皇元年丁亥十一年讓位輕太子尊號日

太上天皇大津皇子薨之後大來皇女從伊

勢齋宮上京之時御時御作歌二首

神風乃伊勢能國爾母有益乎奈何可來

計武君毛不有爾

可かみか可か世せのい世せ能の久く爾にもあらましを

なな爾に志し可かきけひひ見みもあらな久くに

欲よ見み吾わ爲な吾わ毛も不な有あ爾に奈な何か可か來き計け武ぶ馬ま疲た爾に

みみ万ま本ほんししみみわわ可か於かももふふきき見みもあらな久くに

なな爾に可か支し个こむむままつつ可かららししに

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大來

皇女哀傷御作歌二首

宇都會見乃人爾有吾哉徒明日者二上

山乎弟世登吾將見

ううつつ會あひひのひととにあるわれやあすよ利は

布ふたた可か見みやまをちよとおもえむ

磯い之の於か爾に生な流り馬ま醉す木き乎乎手て折を目め杼す令し視み

倍吉君之在常不言爾

いいそそのうへ爾おおふふるつししを多をらめ登

みみすすへへき支見み可かああ利りとい者者那な久く爾に

右一首今案不似移葬之歌蓋疑從伊勢

神宮還京之時路上見花盛傷哀咽作此

歌乎
曰並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂

作歌一首並短歌

天地之初時久堅之。天河原爾八百萬千萬
神之。神集集座而神分分之時爾照日女
之命一云指上日女之命天乎婆所知食登葦原乃水
穗之國乎。天地之依相之極所知行神之命等
天雲之八重攝別而一云天雲之神下座奉之高八重雲川而
照曰之皇子波飛鳥之浮之宮爾神隨太布
座而天皇之敷座國等天原石門乎開神上々
座奴一云神登座爾之可變吾王皇子之命乃天下所知食
世者春花之貴在等望月乃滌波之計武跡
天下一云食四方之人之大船之思憑而天水仰
而待爾何方爾御念食可由緣母無真弓乃
宮柱太布座御在香乎高知座而明言爾

御言不御問日月之數多成陰其故皇子之
宮人行方不知毛一云羽竹之皇子宮人歸邊不知爾爲

反歌二首

久堅乃天見如久仰見之皇子乃御門之荒卷惜毛
ひさ可多の會々見ることくあふき見し
みこの見可とのあれまくをしも
茜刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良
久惜毛或本以伴歌爲後皇子尊殿宮之時歌通也
あかねさ須ひ者てら世と无う者多まの
よわ多るつ支の可くらくをしも

或本歌一首

嶋宮勾乃池之放鳥人目爾戀而池爾不潜
しまみやのまな能いけなる者那ちと利

ひとめ爾こひていけ爾久らむ

皇子尊宮舍人等働傷作歌三首

高光我日皇子乃萬代爾國所知麻之嶋宮波母
多可くてるわ可ひの見このよ呂徒よに
久爾しられまし、万能みや者も

嶋宮上池有放鳥荒備勿行君不座十方

し万見や能いけのおも那る者那ちと利

あらひなゆ支曾きみ万さすと无

高光吾日皇子乃伊座世者島御門者不荒
有益乎

阿万てら須わ可ひのみこ能いまし世は

し万の見可とはあれさらましを

外爾見之檀乃岡毛君座者常都御門跡

侍宿爲鴨

よ曾爾見しまゆみのを可もきみ万さは

つね徒み可ととのゐする可毛

夢爾谷不見在之物乎鬱他宮出毛爲鹿作

日之隅廻乎

東乃多藝能御門爾雖伺侍昨日毛今日

毛召言毛無

ひむ可し能多けのみ可とにさふらへ登

きのふも个ふもめ寸こともなし

水傳磯乃浦廻乃石上乍自木丘開道乎又將

見鴨

み徒つてのい曾のうらわのい者つし

きみさへみちを万たも見む可も

一日者千遍參入之。東乃大寸御門乎。入不勝鴨
ひとひ耳はち多ひまい利しひむ可し能
多可支み可とをい利可てぬ可も
所由无。佐太乃岡邊爾。反居者。嶋御橋爾。誰加住舞无
よしも那久さ多のを可へに可へ利井は
し万能み者しに多れ可すま者無
且覆日之入去者。御立之。島爾下座而。嘆鶴鴨
あさ久も利ひの久れゆけはみ多ち世し
志万にお利井てなけ支つる可も
且日照。島乃御門爾。鬱悒。人音毛不爲者。眞浦悲毛
あさひてるし万能み可登耳お保つ可那
ひとおとも世ねはまうら可なしも
眞木柱。太心者。有之香杼。此吾心。鎮目金津毛

ま支者しらふと支こゝろはあ利し可登
こ能わ可こゝろしつめ可ねつも
毛許呂裳呂。春冬片設而。幸之。宇陀乃大野
者。所念武鴨
こけころも者るふみまけてみゆ支世し
う多のお保のはおも保ゆる可も
朝日照。佐太乃岡邊爾。鳴鳥之。夜鳴。變布。此
年己呂乎
あ佐ひてるさ多のを可へになくと利の
よるのな支可那こ能としころを
八多籠良我。夜晝登不云。行路乎。吾者皆
悉。宮道叙爲。
者多こら可よるひるとい者須ゆくみちを

われ八さ那可らみやこ耳所春る

右日本紀曰三年巳丑夏四月癸未朔乙未
薨

柿本朝臣人麻呂獻泊瀬部皇女忍坂部皇
子歌一首並短歌

飛鳥明日香乃河之上瀬爾生玉藻者下瀬
爾流觸經玉藻成彼依此依靡相之婦乃命
乃多田名附柔膚尚乎劔刀於身副不寐
者烏玉乃夜床母荒良無一云阿禮所虛故名
具鮫魚天氣留敷藻相屋常念而一云公毛相成登
玉垂乃越乃大野之旦露爾玉藻者涅打
夕霧爾衣者沾而草枕旅宿鴨爲留不相
君故

反歌一首

敷妙之袖易之君王垂之越野過去亦毛將
相八方一云乎知野爾過以

し支多への曾て可へしきみ多万多れの
こすのをす支てま多もあ者む可も

右或本曰葬河鳥皇子越智野之時
獻泊瀬皇女歌也日本紀云朱鳥五年
辛卯秋九月己巳朔丁丑淨大參皇子
川島薨

明日香皇女木庭殯宮之時柿本朝臣人麻
呂作歌一首並短歌

飛鳥明日香乃河之上瀬石橋渡一云下瀬石浪
打橋渡石橋一云石浪生靡留玉藻毛叙絶考生

流。打橋生乎爲禮流。川藻毛叙于者波由流。
何然毛吾王乃立者。王藻之如許呂臥者。川藻
之如久。靡相之。宜君之。朝宮乎。忘賜哉。夕宮乎。
背賜哉。宇都曾臣跡。念之時。春部者。花折插
頭。秋立者。黃葉插頭。放妙之。袖携鏡成。雖見
不厭。三五月之。益目頰染。所念之。君與時。幸
而遊賜之。御食向。木髓之宮乎。常宮跡。定
賜味澤相。目辭毛絕奴。然有鴨一云所已綾爾憐
宿足鳥之。片戀嬌爲乍朝鳥往來爲
君之。夏草乃。念之。萎而。夕星之。彼往此去。大
船。猶預不定。見者。遺悶流。情毛不在。其故爲
便知之也。音耳母。名耳毛不絕。天地之。爾遠長
久。思將往。御名爾懸世流。明立香河。乃萬代。早

布屋師。吾王乃。形見何此焉。

短歌二首

明日香川。四我良美渡之。塞益者。進留水母。
能杼爾賀有萬思杼爾如有益
あ須可はし可らみわ多たし世可ませは
な可るみ徒つものとけ可らまし
明日香川。明日谷左へ將見等。念八方。一云念香毛吾
王。御名忘世奴不所忘
あ須かはあす多たにみむ登あもふやも
わ可お保はきみのみ那なわすれ世せぬ

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻

呂作歌一首并短歌

桂文。忌之伎鴨計一云由遊志言文母。綾爾畏伎。明

日香乃真神之原爾久堅能天津御門乎櫻母
定賜而神佐扶跡磐隱座八隅知之吾大王乃
所聞見爲背友乃國之真木立不破山越而狛
劍和射見我原乃行宮爾安母理座而天下治
賜一云掃食國乎定賜等鳥之鳴吾妻乃國之
御軍士乎喚賜而千磐破人乎和爲跡不奉
仕國乎治跡一云掃皇子隨任賜者大御身爾
大刀取帶之大御手爾弓取持之御軍士乎安
勝毛比賜齋流鼓之音者雷之聲登開麻低
吹響流小角乃音母一云笛乃敵見有虎可叫
吼登諸人之協流麻低爾一云聞感指舉有幡
之麾者冬木成春去來者野每著而有火之
一云冬木成春風之共靡如久取持流弓波受乃
野燒火乃

驟三雪落冬乃林爾一云山飄可母伊卷渡
等念麻低聞之恐久一云諸人見引放箭之繁
計久大雪之亂而來禮一云或成曾如不奉仕立
向之毛露霜之消者消倍久去鳥乃相競端
爾一云朝霜之消者消言爾打輝渡會乃齋宮從神
風爾伊吹感之天雲乎日之目毛不令見常開
爾覆を而定之水穗之國乎神隨太敷座而
八隅知之吾大王之天下申賜者萬代然之毛
將有登一云如是毛木綿花乃榮時爾吾大王皇
子之御門乎一云御門乎神宮爾裝束奉而遣
便御門之人毛白妙乃麻衣著埴安乃御門之
原爾赤根刺日之畫鹿白物伊波比伏管鳥
玉能暮爾至者大殿乎振放見乍鶉成伊波比

廻雖侍候。佐母良比不得者。春鳥之。佐麻欲比
奴禮者。嘆毛。未過爾。憶毛。未盡者。言左。敵久。
百濟之原。從神葬。葬伊座。而朝毛吉。木上宮乎。
常宮等。高之奉而。神隨。安定座。奴雖然。吾大
王之。萬代跡。所念食而。作良志之。香來山之宮
萬代爾。過牟登念哉。天之如。振放見乍。王手
次懸而將。恐有勝文。

短歌二首

久堅之。天所知流。君故爾。日月毛不知。戀渡鳴
ひさ可多の。あめにし。ら類。き見ゆへ耳
飛つ支もし。ら須こひ。わ多る可も
植安乃池之堤之。隱沼之。去方乎不知。舍人迷惑
うゑやすの。いけ能つ。み能可久れぬの

ゆ久衛もし。ら須とね。利万とひぬ

或書反歌一首

哭澤之。神社爾三輪須惠。雖禱祈。我王者。高
日所知奴
なくさ者能も。利にみ。わす衛いの。れと无
わ可お本支。みは多可ひ。しられぬ

右一首類聚歌林曰。拾隈女王怨泣澤神

社之歌也。案日本紀云。十年丙申。秋七月辛

丑朔庚戌。後皇子尊薨。

但馬皇女薨。後穗積皇子。冬日雪落。遙望御

墓。悲傷流涕。御作歌一首

零雪者。安幡爾勿落。吉隱之。猪養乃岡之塞
爲卷爾。

布^ハるゆ支^キはあ者^ハになふ利^リ所^トよこも利^リの
ひ可^カひのを可能^カ世^セ支^キ爾^ニ万^{マン}世^セまくに

弓削皇子薨時置始東人歌一首并短歌

安見知之吾王高光日之皇子久堅乃天宮
爾神隨神等座者其乎霜文爾恐美盡波毛
日之晝夜羽毛夜之盡臥居雖嘆飽不足香
裳

反歌一首

王者神西座者天雲之五百重之下爾隱賜奴

お保^ホきみはかみに志^シ滿^{マン}せ八^ハあ末^マく母^モ能^ノい保^ホへ能^ノ志^シたにかくれ多^タまひぬ

又短歌一首

神樂浪之志賀左射禮浪放布爾常丹跡君之所念有計類
さゝなみ能^ノ志^シ加^カさゝれなみ志^シき志^シ久^クにつねに東^トきみ可^カおも保^ホされける

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首並短歌

天飛也輕路者吾妹兒之里爾思有者勸欲見騰不正

行者人目乎多見真根久往者人應知見狹根葛後

毛將相等大船之思憑而玉蜻磐垣淵之隱耳戀

管在爾度日乃晚去之如照月乃雲隱如奧津藻之名

延之妹者黃葉乃過伊去等玉梓之便乃言者梓

弓聲爾聞而一云聲耳聞而將言爲便世武爲便不知聲

耳乎聞而有不得者吾戀千重之一隔毛遣悶流情毛

有八等吾妹子之不止出見之輕市爾吾立聞者玉手

次畝火乃山爾喧鳥綿音母不所聞玉梓道行人毛獨

谷似之不去者爲便無見妹之名喚而袖曾振鶴或本

有謂之名耳聞
而有不得者句

短歌二首

秋山之黃葉乎茂。迷流。妹乎將求。山道不知母。
あ支や万能もみちを志けみまとひぬるいをもとむるや万ち志ら寸毛
黃葉之落去奈倍爾。王梓之使乎見者。相日所念。
もみちはのち利ゆくなへに多ま本こ能つ可ひをみれ八あひ志おも保ゆ
打蟬等念之時念。一云宇都曾
臣等念之取持而吾二人見之。趁出
之。堤爾立有。槻木之。己知恭智乃枝之。春葉之。茂之
如久。念有之。妹者雖有。憑有之。兒等爾者雖有。世間
乎。背之不得者。蜻火之。燎流。荒野爾。白妙之。天領
巾隱。鳥自物。朝立伊麻之。氏。入日成。隱去之。鹿齒。吾
妹子之。形見爾置。若兒乃。乞泣。每。取與。物之無者。鳥
穗自物。腋挾持。吾妹子與。二人吾宿之。枕付。端屋之内
爾。晝羽裳。浦不樂。晚之。夜者裳。氣衝明之。嘆友。世
武爲便不知爾。戀友。相因乎無見。大鳥。羽易乃山

爾。吾戀流。妹者伊座等。人之云者。石根左久見手。名
積來之。古雲曾無寸。打蟬跡。念之妹之。珠蜻
勞髣谷裳。不見思者。

短歌二首

去年見而之。秋乃月夜者。雖照。相見之妹者。彌年放。
こそ見て志あ支能つ支よにてらせともあひ見志いもはいや東
し佐可る

衾道乎。引手乃山爾。妹乎置而。山徑往者。生跡毛無。
布す万ちをひきてのや万にいもをおきてや万ちをゆけ八いけ利と尤なし

或本歌曰

宇都會臣等。念之時。携手。吾二見之。出立百兄。槻木
虛知期知爾。枝刺有如。春葉。茂如。念有之。妹庭雖在。
特有之。妹庭雖有。世中。背不得者。香切火之。燎流。

荒野爾。白栲。天領巾隱。鳥羽物。朝立伊行而。入日成
隱。西加婆。吾妹子之。形見爾。置有。綠兒之。乞哭別。
取委。物之無者。男自物。脇挿持。吾妹子與。二吾宿
之。枕附。婦屋內爾。且者。浦不。恰晚之。夜者。息衝明
之。衝嘆。爲便不知。雖眷相。緣無。大鳥。羽易山爾。
汝戀。妹座等。人云者。石根。割見而。奈積來之。好雲
知。鬱悒久。待加戀。良武。愛伎妻等者。

反歌二首

妻毛有者。探而多。宜麻之。作美乃山。野上乃。宇波疑。過去計。良愛也。
つ万毛。あらはと。利て多。き滿志。さみや。万能う。者きは。すきに。けらすや
奥波。來依。荒磯乎。色妙乃。枕等。卷而。奈世流。君香問
おきつ。那み。よる。あらい。そを。志き。多へ。能まく。らと。まきて。なれる。きみ。可も
柿本朝臣。人麻呂。在石見國。臨死時。自傷。作歌一首

鴨山之。磔根之。卷有。吾乎。鴨不知。等妹之。待乍。將有
可もや。万能いは。ね志。万ける。われを。可も。志らす。ていも。可ま。ちつ。あらむ

柿本朝臣。人麻呂。死時。妻依羅。娘子。作歌二首

且今日。且今日。吾待。君者。石水之。見爾。谷一云交而。有登。不言。八方。
个佐。ことに。わ可。万つき。みはい。そ志。見爾。ま志。利て。あ利。とい。者。さら。めやも
直相者。相不。勝。石川爾。雲立。渡禮。見乍。將偲
多。にあは。あひも。可ね。てむい。志可。は。二くも。多。ちわ。多れ。みつ。志の。者む
丹比。真人。名擬。柿本朝臣。人麻呂。之意。報歌。一首
荒浪爾。緣來。玉乎。枕爾。置吾。此間。有跡。誰將。告
あ。ら。那。み。によ。せ。くる。多。万を。ま。くら。にて。われ。こ。な。利と。多。れ。可。つ。け。む

或本歌曰

天離。夷之。荒野。爾。君乎。置而。念乍。有者。生刀。毛無
阿万。佐可。る。ひな。能。あ。ら。の。に。き。見。を。お。さ。て。お。も。ひ。つ。あ。れ。八。い。け。利。と。无。なし

右一首歌作者未詳。但古本以此歌載於此次也
寧樂宮

和銅四年歲次辛亥河邊宮人姫嶋松原見嬢子屍悲嘆作
歌二首

妹之名者千代爾將流。姫嶋之子松之末爾。羅生萬代爾
いも可なはちよにな可佐むひめし万能。こ万つ能うれにこけおふる万て二
難波方。摺干勿有曾彌。沈之妹之光儀乎。見卷苦流思母
なに八可た志保ひな阿利所志つみに志いも可す可たをみ万くゝるしも

靈龜元年歲次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首並短歌
梓弓手取持而丈夫之得物矢手挿立向高圓山爾。春野
燒野火登見左右燎火乎。何如問者玉梓之道來人乃泣淚
霈霖爾落者白妙之衣濕漬而立留吾爾語久何鴨本名院
聞者泣耳師所哭語者心曾痛天皇之神之御子之御

駕之手火之光曾幾許照而有

短歌二首

高圓之野邊秋芽子徒開香將散見人無爾
多可万とのゝへ能あ支者きい多つらにさきかち利なんみるひとな志に
御笠山野邊往道者己伎太雲繁荒有可久爾有勿國
み可さや末のちゆくみちはこ起多くも志けくあれ多る可ひさにあらなくに

右歌笠朝臣金村歌集出

或本歌曰

高圓之野邊乃秋芽子勿散彌君之形見爾見管思奴播武
多可万とのゝへ能あ支者きさる那ゆめき見可多みこみつゝ
しの者む

三笠山野邊從遊久道己伎太久母荒爾計頼鴨久爾有名國
み可佐やまのへよ利遊くみちこき多くもあれ二個可那ひさにあらなくに

萬葉集卷第二

昭和十一年七月廿五日印刷
定價金貳圓零拾錢

金澤萬葉集
(地)

編輯者 かな名蹟全集刊行會
代表者 武田基一
東京市下谷區中根町七二
發行人 武田基一
東京市荒川區高平在町六丁目一六〇
印刷人 黒川秀藏

發行所

東京市下谷區中根町七二
武田墨彩堂
電話 印刷部 三五七番
發售部 六〇五番八番

大寶之末章子章平沈河國時見結松之標明人蘇
後好見跡君之結有標代乃子松之字礼
字又好見寺岡

のらうのしおきうふじすうのいけらる
こまはうわをまたうらるる

近江大津宮法皇天皇代天今州別天皇法皇天皇

天皇守躬不豫之時太后在治云一書

天原振政見天皇乃治事天皇久天皇有
あまのたももあまのけいふのねはきりあ
いのちけあうくあまのしし

一書曰近江天皇守體不豫法病皇時太后
在治法云一書

青濱乃木眞能上戸願歿布法羽目今矣
雖視貞余不獨壽崇

あをこたのけはりのうらをいりよは
のけふおしよしあかねも

天皇崩後之時倭太后出作一首

人共凝念息登母玉湯歌今可ん下所忘鴉
ひとけつとたしいやじりしままうけし
うけよみうけわすわねも

天皇崩時婦人作一首 姓所未詳

空蟬叩神余不勝大離后而初嘆君放后而
吾忘君小有共手今弄持而衣有共脱时也
無吾忘君曾伎賊乃夜夢所見語

天皇大崩之時三首

知是存乃懐初跡倭太后船泊之登万里人

標活麻思字 類曰

うらをこたのけはりのうらをいりよは

とららるるよもいしめゆはよ

八隅初之吾期たま乃大津船竹可お立而有

乃車埒舎人
吉年

やしまたらわらわらおちくらのおぬきすね
あらららひなしんてらの

大后所歌一首

鯨魚取淡海乃海之國放而榜未船邊

附而榜未船製津加伊痛勿波社曾与津

加伊痛莫波社官若草乃嬌之念馬立

石川夫人所一首

神楽浪乃大山守若乃誰可山余標結若

毛不有因

た、ゆくのおちやましんけしん

やまじよゆよきよしあわくい

後山科所陵返敷之時頌曰王作亭一首
八陽知之初期大王之思也所陵奉仕流山科
乃鏡山今夜先毛衣之畫書先母日之書矣
耳爭泣下也而竟百殊誠乃古言人先志別
向

明日奉清出原宗御宇天皇代 天皇御宇原流也今天皇
皇孫曰天皇天皇

十帝皇女亮時高帝皇子尊所行三首

三詔之神之并酒飲已具耳矣白時見監
下告不寢夜叙夕

非山之山邊志藤本綿種本綿如以耳故
余長等也伎

之わやまのやう一まうゆしきし、ゆし
うくのやゆちいさうとむかひし

山振之三儀是山流水の酌余雖好道之白鳥

やまありしむらひにけりやまのふりかへ
くたにゆきかへりけりけり

仁曰七年七月丁亥朔葬于帝

室女帝世病之及死於中

天皇崩之時大臣諸作之

八隅知之我大臣之志也賜良之明

共同賜良志也乃山之昔也今也

鴨同給麻思川日色鴨石賜良自其山

放見下矣也其後衰明未也乘依倚晚甚妙

乃衣之神也乾時又無

一書曰天皇崩之時天皇漸繫三

然火物取而果而論路危乃澄不言八

としし力とせりてりしやつるは

いそいそす

雲向而止凍雲之青雲之白雲離去日兼離而

天皇崩之後八年九月九日在河津有會之長

夢兼習賜河字一石 在河津中

明日香能清法原乃宮令天下所知食之八禍
初之昔大之高照日之皇子河方令所食念可
非比乃伊勢能國夫國津原色麻足波令道
氣能味香字孔流國令味凝父令乞寸高照

日之河子

藤原宮法字天皇代 高天原志野恒天皇

天皇元年丁亥土年讓位輕太子尊号曰

太上天皇大津皇子志苑之後大津天皇女後伊

勢各字上京之時河字二石

神代乃伊勢能國令女有益字天皇何了未
計武君毛不有令

うけもめいぎれくよしあへ
けまをきけしきらめりか
欲見君為君色石有公た
みわがよあふもあふ
い

妙哉大津皇子尻松為城二上
皇女氣無法印歌二首

宇都宮見方人余有吾我後
山年弟女登吾好

うつろみめいとあわね
あふもあふもあふもあふも

磯之於本生流馬醉木年
信吉君と在常不言尔

いそのうしつよわさ

世若玉花之貴在木管月乃海波之計武跡
天下一之合四方之人乃大船之志海与大水作
而待今行方尔海念食可中縁母と幸さう乃思今
字相太布登序海也幸幸高ちけら切言今
海言不海向日月之數夕成海も故皇子之
家人行方不知也 一之判所皇子家人
海言不知也

反歌二首

久望乃天見如久你見之皇子乃山向之志而望
ひせいしあうらうらうらうらうらあきり
あめあうらうあしあうらうら

為判日若雖照有焉山之夜渡月之隱良

久惜毛 或中一の神志乃後皇子
再渡家く時三つ也也

あめあうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

或平歌一首

鳴宮乃池之放鳥人日今志而池今不潜
しまりやのあまれいけたのうらみれらむ
ひらめよこいけいけはくくくく

皇子尊宮舍人ホ物傷伴三首

高亮我日皇子乃萬代全國所知麻之嶋字波母
よくくくくわくひのりあゆむ行おに

くくくくくくくくくくくく

鳴宮上池有放鳥意備勿行君石府十方

しりらりやれいけのおもあらむれらむ

あしひまゆききあまきし

高亮吾日皇子乃伊はむ若嶋河門た不蒸

有益事

いりてしむわらひのやれいりきけ

しつゝのうらまはあなせうまを

外今見之檀乃思毛考は先常那海門跡
付宿の物

ようろうまうらまゆのあししまつるまは
アゆはあまのぬすまも

夢今谷石見を之物手替地字出之由度
日之隈廻す

東乃夕暮能海門今誰伺付昨日也今日
毛石言毛無

いりうははのありまきあつた
きかよしむよりあまこい

水傳儀乃浦廻乃石と下自木血用返す又
見鴨

ふはこあまのうらまのま

きみこころをさるるも

一日老子返来入る東乃大寸海門辛入不勝鳩

いとこころはらるるいふりわいせし

しりあめをさるるわいせし

所由无法大方思道余及居共汚濁指余誰加位像无

よりいれくさるるあつていっつわ井は

しこめをいじわすまあせ

且覆日之入を若所立之嶋余下は而嘆語鴨

あつてくしわいのくたゆけはるる

あつていれをさるるわいせし

且日照嶋乃海門余鬱抱人音之不為若も浦悲色

あつていれをさるるわいせし

いれをさるるわいせし

其木柱た心若有之香柳此各心録目金津毛

あゝこゝろよこゝろ　んはあーん

はわのこゝろーつめねーし

毛許呂蒙百春冬行設而卒之宇陸乃大野

若所念武鴨

いけいふーたらふーあけーあゆー

うーのあゆめはねんぬー

朔日恒依た乃思なき今鳴る之長鳴之爰布也

年じ品字

あはしいらーとーのさーくーの

よーのたーのぬーの

八夕龍良我夜晝登不之行路字音共此

生字返教為

あゝこゝろよこゝろ　んはあーん

はわのこゝろーつめねーし

石日本紀曰三年己丑夏四月庚未朔乙未

死

栲車朔八麻呂秋泊漱部身女忍改部身

子孫一有 并種云

飛鳥明日香乃河之上漱余生玉藻女下漱
余流躬浸玉藻成彼依此麻相之媼乃命
乃夕田名附柔膚尚字鈎刀於身劍石稜

共為玉乃夜床母焦良無 一三所記 兩處故名

具較魚天氣田抄深相屋常念而 一三所記

玉垂乃越能大野之也露余玉蒙女濫打

夕露余衣共沽而草枕穰宿鴨為西石相

君故

友等一有

抄妙乃神易之君玉垂之越野也吉也也

桐八方

一之字知野女
とね

こころのすくしあらしむし

大或平曰葬河嶋皇子越智野之時
秋泊瀬皇女三之日在比之末島五年
辛卯秋九月二日朔壬午清大冬皇子

川嶋苑

明日香皇女在延彌宮之時掃平御人麻

呂作号一者并延云

飛鳥明日香乃河之上流石橋渡一之字下流

打橋渡石橋一之字下流麻留玉原毛教給女

流打橋中辛為礼流川原毛教干矣波中流

何也毛各王能立矣玉原之、母許呂臥大川原

之少麻相之巨素、胡家辛忘賜武夕字辛

特賜我字那曾巨迹念之時春部共在析標
以秋之共黃梨標以秋妙之神擴鏡成雖見
不飲三五日之益同類深所念之君與時會
而逝賜之由食向未隨之字字常字此之
賜味澤相同輝毛絕奴也存鳩一之可已談金攝
宿定与之斤一烹獨一之羽鳥為一之胡漢未為
君之夏草乃念之妻而夕星之波計此古大

船行頭不實見夫也同流情色不在其坡為
便知之也音耳毋若耳色不絕天地之跡遠長
久思於付逝者余曠在流明日香河乃為代早
布屋帥吾丁乃所見河此會

禮部二首

明日香川心我良羨渡之塞益共在逝而水母
能於余願有萬思一之水乃与
抄年如有益

將軍士年受賜而千解破人年未百歲不
仕國年治疏非_和身子隨何賜夫大治身
大乃和帶之六漸年余以和持之出軍士年
勝毛比賜皆流散之昔夫雪之於登同麻位
吹撥流小角乃音女_{言故}歌見有虎可叫
吼登諸人之協流麻位余_{麻位}柏崎有情
之魔若冬木成妻古未若野每着而有火之

_{一云冬木成妻} 風之共麻也久和持流与波受乃
可燒大方_{一云中} 孰可色伊美渡
鹽三雪落冬乃林余_{一云林} 引放兼之態
等念麻位同之恐久_{一云恐} 引放兼之態
計久大雪乃乱而未礼_{一云我誠} 不知仕三
向之毛正法霜之消去消信久古島乃相覺端
余_{一云胡霜之消去消言余打碎} 渡余乃皆字從外
_{一云女良養布波之余}
比余伊吹感之天也字日之目毛不令人見常周

今度賜而宜之。水德之國。子孫隨太極。而
八陽知之。吾大王之天下。申賜共為代。今世之
物有登。一云如是也。女思无等。未綿花乃榮。時今吾不日。身
子之。浙門。子。一云刑所身。子浙門。孫家。今。紫。未。耳。而。走
使。浙門之人。色白妙。乃麻。衣。着。垣。女。乃。浙門之
原。本。未。根。判。日。之。畫。畫。自。抄。伊。波。比。伏。官。為
玉。結。考。今。至。先。大。殿。子。柝。於。見。下。鷄。成。伊。波。比
迴。誰。竹。候。伏。母。良。以。不。得。先。看。鳥。之。依。麻。強。比
奴。礼。若。嘆。色。未。也。今。憶。色。未。不。盡。先。言。左。殿。久
百。洛。之。原。後。孫。舞。之。伊。波。比。胡。色。吾。木。上。字。子
常。言。不。高。之。耳。而。孫。隨。安。定。序。奴。誰。也。吾。大
王。之。為。代。孫。所。念。食。而。作。良。志。之。音。來。山。之。字
為。代。今。遇。事。登。念。我。天。之。心。柝。放。見。作。玉。手
決。然。而。好。似。恐。有。騰。父。

乙卯庚戌後皇子尊亮

但馬皇女亮後穗積皇子冬白雪落庭雪山
暮悲傷流涕出作歌一首

零雪若女栝余勿落吾隱之栝美乃思之寒
為美余

かきゆよはあきふにたふりふりふりふり
かきゆよはあきふにたふりふりふりふり

乙卯皇子尊亮時量始在入作歌一首 并延喜

安見知之者王高亮日之皇子久堅乃天皇
余非随外亦付若其平霜父余思美畫波毛
日之晝夜羽毛夜之晝外亦唯嘆能不思者
蒙

友歌一首

王若神西府若天雲之也百重之下余隱賜奴

今晝羽裳浦不樂晚之夜若裳氣衝明之嘆女也
或為使不知今之衣相自辛之見大鳥乃好見乃
今吾忘流妹若伊屋等人之若石根在夕見辛若
積未之去雲曾無寸打輝然念之妹之味情發
訪歸石裳不見思矣

短歌三首

去年の秋乃月夜若唯照相見之妹若今年夜

こころそとあはれはらふはらふ女もあはれ思はれはらふ
しあつら

今若通主乃年乃山今妹辛最而の徑江若け然色無
女母のらをほほの若いけを枝もつらまゆにけり

或存三ツ口

宇都宮若等今之村携手各二見之出三百足柳木
慮之期之今枝判有若若若或今有之妹近雁也

恃有之婦遊離有世中背不待夫香切火之燎流
焦野余白榜天命申隱焉自物胡立伴行而入日成
隱而加婆吾妹子之所見余直有緣配之乞米別
取委物之無夫男自物脈秩村吾妹子與二各宿
之枕附嬌屋內今日若浦不於晚之夜夫息漸明
之潮嘆為使不知唯着相緣之大智別易公余
汝忘休府亦人之夫右根刻見而大積素之好會

如樽恃欠待加忘良或愛使妻而夫

及三ノ二百

妻毛有夫様而夕命三昧之御方乃言波難也言河邊
つらあははあまじき徳心之有凡なるもあまじき心之有
閑波来依三藏事も妙乃枕亦美而忘世流君去向
存つ所のあまじき心之有凡なるもあまじき心之有

柿本朝人麻呂並石見國臨北時自傷信号二百

鴨之盤根之美有昔年鴨不知妹之待作有
之也此は憶念は情わねし心すけりあはらふ

柿本羽人麻呂死時妻依羅娘子に云る

是言是合者待君死石水之見余一之交而有誓不言分
心所とわらふ事なむと云るまこと年ありふ

直相夫相不勝石川余雲之波礼見尔好思

と云はあはれなむしと云はくもと云はむと云は

丹徒人爾類柿本人麻呂之妻也云一書

直源余縁未玉中枕余直吾此向有跡誰得告

あはれなむと云はくもと云はむと云はむと云は

或云三ツ

千離来く直野余君直而念下有共生刀色也

河原ありい多あいのばらるる花はむかひつあはれけり

古一首号御来詳但作中以此言載於此也

寧樂子

和銅四年歲次壬辰遊安人姫島松原以孀子成世業作

三ノ三

妹之若老干代命相流姫島之子松之末公孫傳世為代命
川乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
難波方恒子勿有宿祢沉之妹之在儀子乃其言流之母
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

靈龜元年歲次丙申秋九月志孝親王薨於時年三

并三

權り手記持而夫夫之譜乃夫手狹之向高曰少公老野
燒野火登見在左燈火平何如問若玉權之通東人乃三流
露深余落自妙之亦流清而三而各公夫何鴨在右院
向若三身所而美語天心首痛天早之孫之流子之所
駕之主火之先官之許也而有

三ノ三

終